

さくらんぼ「紅」シリーズの取り組み

さくらんぼは消費者からの人気が高く、山形を代表する果物としてのイメージが広く定着しています。主力品種は、大正元年に東根市の佐藤栄助氏が育成した「佐藤錦」で、甘酸適和で品質が極めて良好であることから特に人気が高く、県内の約七四％がこの品種で占められています。

一方「佐藤錦」を含めて多くの品種では、他品種の花粉がなければ結実しない特性があり、受粉のため複数の品種を植栽する必要があることや、収穫時期の異なる品種により出荷期間を拡大し、併せて収穫労力の分散を図るため、県ではさくらんぼの育種に積極的に取り組んできました。

中でも、平成三年に品種登録された「紅さやか」及び「紅秀峰」は、その後の本県育種さくらんぼの名称に共通するいわゆる「紅」シリーズの始まりとなった品種であり、特に「紅秀峰」については近年市場評価が高まっています。

(1) 紅秀峰

収穫時期が県内で六月上旬となる極早生系の「紅さやか」、六月中旬収穫の「佐藤錦」に対し、「紅秀峰」は出荷時期が七月上旬からとなる晩生品種です。

糖度が二〇％程度と高く、果実の大きさは一〇g程度と大果となります。果皮が果実全面に鮮紅色に着色し、見栄えもよいことから、贈答需要にも対応できる品種として、県では積極的に作付け拡大を図ってきています。

市場評価が高まるとともに、作付けは順調に増加しており、特に寒河江市では平成十七年度から「紅秀峰」の新たな産地化を進めており、新植が進んでいます。現在（平成十八年



最新の統計）県全体では栽培面積約二五〇ヘクタール、県内さくらんぼ全体の約八％を占めるまでになっており、ナポレオンの約九％に次ぐ県内第三位の品種となっています。

(2) 「紅」シリーズの特色紹介

「紅さやか」、「紅秀峰」以降も県ではさくらんぼの育種を進めてきており、平成十二年「紅てまり」、平成二十年三月には「紅きらり」が品種登録され、また、平成二十年七月には「紅ゆたか」が品種登録の前段階である出願公表されています。

【紅シリーズの品種特性】

① 紅さやか

山形県での収穫期は六月上旬となる極早生品種。開花期は「佐藤錦」とくらべ一〜二日早く、「佐藤錦」の受粉樹として適性が高い。

果実は六g程度となり、早生としては大玉の部類に入る。果皮色は適期には帯朱紅色だが、収穫後期には紫黒色になり果肉が軟化する。適期収穫が重要となる。糖度は一四〜一九％。

② 紅てまり

果実は一〇g以上と大果となり、果皮は果実全体に鮮紅色に着果しやすい。糖度は二〇％以上と高く甘酸適和で食味良好。収穫時期は山形県において七月上旬中となる晩生品種。



③ 紅きらり

一樹でも結実し、毎年収量が安定している。どの品種に対しても受粉樹となり、特に開花期が「佐藤錦」より一〜二日早いので、「佐藤錦」の受粉樹として最適。大きさは九g程度と大きく、鮮紅色で外観がよい。糖度は一九％と高く、甘さの質はさっぱりとしており食味良好。収穫時期は「佐藤錦」と「紅秀峰」の間の六月中下旬となる。



④ 紅ゆたか

収穫時期が六月中旬と「高砂」とほぼ同時期となる早生品種。「佐藤錦」、「紅秀峰」等主要品種との交配と合性があり、開花期は「佐藤錦」より一〜三日早く、「佐藤錦」の受粉樹として適している。大きさは九g程度と大きく、果形は横幅が広く特徴的な形をしている。糖度は一八〜一九％程度と早生品種としては高く、甘さの質が濃厚で食味良好。



「紅秀峰」以降、これら特徴ある「紅」シリーズが育成されてきていることから、県ではこれら新品種について積極的な普及拡大を進めております。これら新品種の導入により、これまで「佐藤錦」に集中しがちであった品種構成からの脱却を進め、出荷期間の拡大や生産の安定を図り、今後とも他県の追随を許さないトップブランド産地としての振興を進めていくことにしています。

表 品種構成の目標（山形県農林水産振興計画：平成18年3月）

品 種 名	平成15年（実績）		平成18年（現状）		平成22年（中間目標）		平成27年（目標年）	
	栽培面積	割合	栽培面積	割合	栽培面積	割合	栽培面積	割合
佐 藤 錦	2,050ha	73%	2,292ha	74%	2,070ha	70%	1,950ha	65%
紅 秀 峰	167ha	6%	250ha	8%	450ha	15%	600ha	20%
ナポレオン	350ha	13%	293ha	9%	200ha	7%	150ha	5%
そ の 他	223ha	8%	265ha	9%	250ha	8%	300ha	10%
合 計	2,790ha	100%	3,100ha	100%	2,970ha	100%	3,000ha	100%